

# 村上原野“縄文の響”展

—若き縄文アーティストの鬼才が遺した仕事と夢—

会期：7月17日(土)～8月22日(日)

「ひたすら心を沿わせてきた縄文のかたち。いにしへの土器・土偶をなぞり動かしてきた手が、いまようやく自分の奥深くから湧き立ってくるゆらめき、リズムに突き動かされて文様を渦巻かせている。いまここにある縄文。奥底に根付くものを、蕾から花開かせどこまでも飛翔させてゆきたい。」(村上原野)



「渦巻く翅(つばさ)のヴェーナス」(2020年)

“ギャラリートーク”  
7月17日(土) 13:30～15:00

【考古学者】小林達雄  
×  
【縄文造形家】猪風来

津南町 農と縄文の体験実習館



〒949-8201  
新潟県中魚沼郡津南町大字下船渡乙835番地  
TEL・FAX: 025-765-5511  
E-mail: najo@najomon.com  
U R L: <http://www.najomon.com>

- 入館料 / 無料
- 開館時間 / 午前9時～午後5時

- 休館日 / 月曜日、7月19日(月)
- 駐車場 / 普通車200台 大型バス5台

【お車をご利用の場合】

線馬IC→塩沢・石打IC(開越自動車道約120分)→R353経由(約35分)  
新潟西IC→越後川口IC(開越自動車道約60分)→R117経由(約60分)

なじよもん

検索



主催：津南町教育委員会

\*感染症拡大の影響などで、内容・会期が変更になる場合があります。

## 村上原野“縄文の響”展 — 若き縄文アーティストの鬼才が遺した仕事と夢 — によせて

縄文造形家・村上原野は、北海道の原野に生まれ 幼少期を父・猪風来の縄文作品や縄文野焼きに日々身近に触れながら育った。新潟県立歴史博物館開館（2000年）の際には、父と共に祝賀用のくす玉割をしたり、館所蔵の火焰型土器を模写したが、当時村上原野は中学1年生だった。2010年以来、岡山の猪風来美術館で本格的な修行に入る。その後創作した作品を見ると、生命のドラマ・物語性を感じさせるもので、幾多の縄文土器をつくりその様式を学びとった者のみが成しうる独創的な縄文作品である。

私は、村上原野こそが現代縄文の旗手として世界で活躍する人物だと期待してきた。しかし昨年制作中に、手に竹べらを持ったまま32歳の若さで逝去するに至ったことは、まことに残念の極みである。この絶作となった作品、無数の渦巻く火焰型土器S字文様の中に浮かび上がるヴィーナス像は、まさに未来へ羽ばたく姿である。これはまさしく若き縄文アーティストが遺した仕事と夢を表出した名作だと思う。

親子二代にわたって成し遂げてきた縄文芸術の復活と新しい縄文表現の追求は 正しく評価されるべきものと考えている。私は猪風来の「土夢華・宇宙創生」と村上原野の「渦巻く翅のヴィーナス」作品を新潟県長岡市の悠久山公園にたちあげて「未来縄文の杜」構想を実現したいと願っている。

國學院大學名誉教授 小林達雄



「淵源生まれくる花」(2014年)  
縄文野焼き作品



「生命の大地」(2017年)  
縄文野焼き作品



焼き上がった「生命の大地」



「地より来て地に還るもの」(2018年)  
作品制作中の村上原野

### 【村上原野プロフィール】

縄文造形家 / 北海道浜益村出身 岡山県新見市在住 1987年生まれ。

猪風来美術館を拠点に創作活動を行う。

村上原野は北海道の大自然の息吹と、父（猪風来）の縄文造形作品にかこまれて育つ。中学生の時は新潟県で火焰型土器の発掘に立ち会う機会をもち、またエクアドルの野焼きの村を訪ねる父子の旅も経験。2010年新見市猪風来美術館で本格的に縄文修行に入り、彼は縄文土器・土偶の徹底的な模写を通して体得した縄文の心と技を基盤として「現代に生きる己の感性」によるニュー縄文造形を創出する。また「土器・土偶作り」「縄文野焼き」の指導・実演など各地で普及活動も実施。近年では多ジャンルの若手縄文アーティストらと「ARTs of JOMON」展を国内外で展開し、2015年には米国デンバー展、2017年にはマレーシア展に参加。2019年には米国ボルダー市“縄文の祭典”で北米初の縄文野焼きを実現。その技量と根源力が高い評価を受けている。

2020年2月16日未明、作品完成直前に逝去。享年32歳。

## 若き天才縄文アーティスト村上原野を語る（縄文造形家：猪風来）

縄文造形家・村上原野は、私と共に親子二代にわたる悲願を遂に達成した。それは21世紀芸術シーンに縄文芸術の大輪を花開かせて、渦巻く生命と魂の輝きを放って世界の人々を魅了する新しい縄文造形美のスタイルを確立するという悲願であり、それぞれの流儀の縄文様式美の体現者として活動するという芸術の最高峰の高みを目指すものだった。

代表作「生命の大地」(2017年)は、縄文土器を〈復活—体得—創造〉する芸術活動を突き抜けて現代に生きる彼の感性そのもので、大自然と大地から湧き立つ豊饒なる精気・霊気を表象した精密で重層的に渦巻く圧倒的創造性を示した。また「地より来て地に還るもの」(2019年)はエゾシカをモチーフにして生死再生をテーマに、大地に根差す縄文造形思考の究極の表現美を示した。そして絶作となった「渦巻く翅(つばさ)のヴィーナス」(2020年)は、愛する女性をモデルに、大地から湧きあがるスパイラル文様の美しく伸びやかな表現をもって、火焰式土器や大木式土器、勝坂式土器などの古来の様式を15種以上体得した者だけが創造し得るものである。更に縄文の輪積み技法で最下部から形と文様を完成させつつ上部へと、巧みな手指技を連続して繰り出す造形技術を持つ者だけが成しうる最高に高度な技量が示されている。

これらの作品は私、猪風来の作風を超えて、まさしく原野流儀の独自性をもち、古縄文を受け継ぎつつ現代に生きるものが表現し得る「新しい縄文様式美」を確立した偉大なる作品である。村上原野はまがうことなく若き天才縄文アーティストである。